4 歯科疾患の疫学

歯科領域には多くの疾患があるが，ここでは，そのなかでもとくに有病率の高い，う蝕と歯周病について述べる．

う蝕と歯周病に共通する疫学的特徴

① 有病者が多く，いわゆる歯科的健康者はきわめて少ない．
② 発病または有病によって，直接的に死亡することはほとんどない．
③ 感染性を有しない(ただし，う蝕の場合，母子感染が重要視されている)．
④ 発病に強い年齢差がある．
⑤ 疾病に対する感受性は，歯種および歯面により異なる．
⑥ 一般に慢性経過をたどり，自然治癒力が弱い．
⑦ 日常の生活習慣（とくに食習慣）との関連性が強い．
⑧ 口腔清掃状態との関連性が強い．ただし，口腔清掃回数とう蝕との関係は明確ではない．

Support

A う蝕の疫学

1 宿主要因との関連

a 民族，人種

う蝕は広く世界にまん延している疾患であるが，人種または民族によって有病状態に差が認められる．民族・人種的背景には，文化的，社会的，経済的な差異，また，遺伝的な差異が存在し，それらの要因が食習慣や口腔衛生習慣，歯科医療受診などの面で差を生み出すので，う蝕有病の重要な要因となる．しかし，民族・人種差の直接的影響によると断定するためには，環境因子の差の分析が行われる必要がある．

b 年　齢

う蝕有病者率には著明な年齢差が存在し，年齢とともに増加する傾向を示している（図 6-13，6-14）．

う蝕有病者率 ➡ p.43

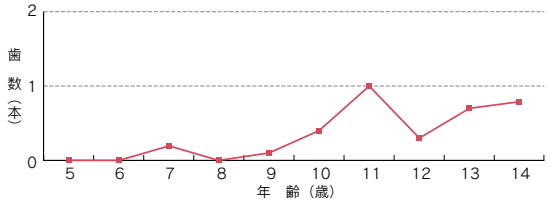

図 6-13 ▶ 年齢と DMF 歯数
（厚生労働省「令和 4 年，歯科疾患実態調査」）

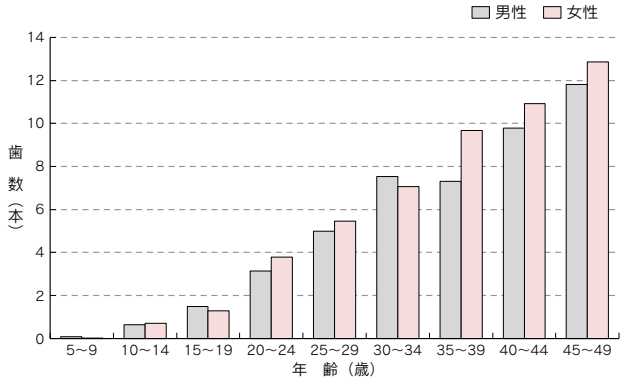

図 6-14 ▶ 性・年齢別 1 人平均 DMF 歯数
（厚生労働省「令和 4 年，歯科疾患実態調査」）

表 6-19 ▶ 平滑面におけるう蝕有病の順位

1. 第一大臼歯の近心面と遠心面
2. 上顎第二小臼歯の近心面
3. 下顎第二大臼歯の近心面
4. 上顎中切歯の近心面
5. 下顎第二小臼歯の近心面
6. 上顎側切歯の近心面
7. 上顎第一小臼歯の近心面
8. 上顎犬歯の近心面
9. その他の歯面

(Reid & Grakinger, 1955)

c 性

う蝕有病者率には明確な性差はない．以前は 1 人平均う蝕歯数は女性のほうが多い傾向が認められていたが，前回同様，令和 4 年（2022）の結果でも判然としなくなっている（図 6-14）．

d 歯　種

歯の形態・構造の差などから歯種によって有病率が異なる．乳歯では上顎乳中・側切歯，上下顎乳臼歯に多い．永久歯では上下顎第一・第二大臼歯に最も多く，上下顎犬歯が最小であり，下顎切歯部は罹患しにくい．

e 歯　面

う蝕に対する感受性は個々の歯面で異なっている．最も感受性の高い部位は，第一・第二大臼歯咬合面である．咬合面の深い小窩あるいは裂溝をもつ歯面はう蝕になりやすい．咬合面小窩，裂溝のう蝕感受性は，平滑面に比べて著しく高い．平滑面のなかで最もう蝕になりやすい歯面から，なりにくい歯面の順位を表 6-19 に示す．